

17世紀イギリス・バプテスト

B. R. ホワイト

目次

序文とまえがき

概説

凡例

第1章 イギリスジェネラル・バプテスト（1660年まで）

第2章 カルヴィン主義バプテスト（1660年まで）

第3章 大迫害の時代（1660年～1688年）

第4章 17世紀のバプテスト教会における女性たち

第5章 結論： ジェームズ2世

資料1：信仰告白

資料2：イギリス・バプテストの歴史家たち

参考文献

17世紀関連文献

索引

序 文

このたび本書の改訂を思い立ったが、その機会を与えて下さったバプテスト歴史協会委員会に深く感謝を申し上げたい。初版は、健康上の理由と当時責任を持っていた多くの職務のため、仕上がりは十分とは言えず、中途半端な部分を残したままになっていた。その内のひとつは、いかなる時にも常に励まし、執筆を可能にしてくれた関係者に対して、私の謝意を表せなかったことである。特に、妻マーガレットとジェフリー・ナットオール博士に対してはそうであった。ナットオール博士は、初期非国教会派研究の最も優れた歴史家である。

改訂にあたって、初版を完全に書き改めることはしなかった。しかし、手にとって頂ければわかるように、「17 世紀のバプテスト教会の女性たち」という新しい章が加わっている。また、多くの他のテーマについても初版よりも分量を増やし、内容を充実させている。

BRW

まえがき

この改訂版は、B. R. ホワイ ト博士の病状が進む以前にすでに完成していたが、出版までには至っていなかった。マーガレット・ホワイ ト夫人は関係資料や原稿群を集め、ジョン・F. W. ニコルソン牧師は、出版に向けて、それらを細心の注意で整えて下さった。このおふたりに感謝を申し上げたい。バプテスト歴史協会は、本書をもってホワイ ト博士の功績を讃えるものであるが、同時に、言葉に尽くせない多くのことを博士に負っている事実がそこに刻まれてもいる。博士がバプテストの歴史を理解するために、実に大きく貢献をなさったことか。また、博士が、それによって、現在とこれからのバプテストたちの、自らの真実なアイデンティティーを知る営みを助けたいと願っていたことか。本書はそれを語っている。

ロジャー・ハイデン

概説

今日、教派史に関心を持つ人たちは、大変少ない。これについては、もっともと思える次のような理由がある。教派の壁をこえるエキュメニカルな働きに関心を持つ人々には、他教派との戦いのために上げる闘いの声の予行練習、あるいは、記憶の彼方に追いやってしまいたい争いの古傷を再び思い出させるそのように思えて不快なのだ。歴史家、特にそれを職業としている輩は、教派史をあたかもボール紙のように、無味乾燥で深みのない叙述ととらえる。分派グループの脈絡のない系図を議論する素人の好古家たちが、生き生きとした生命力を持つ政治史、経済史、社会史、またそれに類する学問的な歴史を度外視して書き上げたかのように考えるからである。その上、そしておそらく多くの場合、バプテストの歴史は、断片や過激な非主流派によって著されたと考えられている。そのため、17世紀のバプテストの歴史は、純粹に学問的な歴史研究としては絞り込むポイントもなく、研究し甲斐のない対象とみなされる。

しかしながら、教派史は、特にエキュメニズムに関心のある人々にとっては、数あるキリスト教会の中の特定のグループが、自らの特徴を形作った内面の力、そのアイデンティティーを成立させたもの、そしてそれが依って立つ伝統を明確にするのに役に立つ。エキュメニカルな討論において、他の誰よりもバプテストが全くナンセンスな議論をしてしまうのは、自らの伝統のルーツを丁寧に訪ね、研究してこなかったためである。これはまた、歴史家にも同じである。とりわけ、宗教が大多数のイギリス人にとって大きな関心事であった時代の人間を理解しようとするれば、最近の研究者によって光の当てられたイギリス・バプテストの肖像画に（風刺に近い大胆な筆致ではあるが）、何か益するものを見出せるかもしれない。

バプテスト自身にとっても、現在迫られている課題に対して決断を下す際に、また今後の歩みを視野に入れる際に、自らの伝統に関する知識を持つことは有益であるに違いない。多くのバプテストは、これまで自分たちが紡いできた証に対して、第一義的なものと第二義的なものをはっきりさせてこなかった。例えば、浸礼のバプテストと信仰者のバプテストは、ほぼ同じ重さで重要であると確信して止まない人たちがいる。また、教会総会は、そこで神の御旨が模索され、それに従う機会が提供される場ではなく、あたかも株主総会のようなもので十分だと信じる人たちもいる。

継承されて来た証の意味を理解し、それに評価を加えるには、ある深みを持った研究が要求される。過去の出来事の記録や、為された決定、力説された主張、そして新たに作られた組織などには、これらが存在している理由を説明するために、関連する様々な記録や資料を集めることが必要である。そのような研究は、自分たちのことに引きつけて言えば、なぜバプテストが草創期にそのような事を言ったのか、何を行ったのかを理解させ、バプテスト以外のキリスト者たちに対して、自らを十分に説明することを可能とさせるはずである。加えて、自分自身の歴史についてよりはっきりした見解を持つことは、ある視点を持って自分たちの現在の状況を理解し、今日なお、過去の事例とその議論が、時代の批判に耐えて役立つかどうかを見極めることも助けるだろう。

ここで再び教派の過去を著すことは、今日、バプテストにとって次の3つの意味において有益である。まず、容易に忘れ去られたり、脇へ押しやられたりするような、危険で、リスクに満ちたバプテストの責任と献身を思い出させる。次に、過去の方針や発想を導き出した源泉が、いかにたびたび偶然や思いもしないことによって、時には自己中心によってもたらされたのかを知らせる。しかし同時に、思慮分別や知恵、そして高価な犠牲によってももたらされたことも、である。以上のことは、現在の政策やその発想の出どころについて、今の自分たちにその全責任があるかのように捉えることに對して警告を発する。最後に、人間の、そして教会の特定の方針やその発案が、実のところ、これまでの長い歴史を通じて、神の民に関わってくださった神ご自身の物語であり、今も変わることなくそうである事実を人々に理解させる。

伝統。その概念、重要性、そして権威については、多くの場合、いとも簡単に伝統を否定しがちなバプテストにも大切である。個人の生、人々が書き残したものの、教会やその他の様々な組織における教派の生き生きとした歴史の流れが伝統と呼べるものなのである。その歴史において、聖霊が、時には人間と対峙しつつ、また時には人間と共に、常に働いてきたのだ。

バプテストの定義と真理に関する了解事項（assumption）

はじめに、イギリス・バプテストが「再洗礼派（アナバプテスト）」と呼ばれるようになった理由と、それがバプテストに決定的なダメージを与えることになった背景を説明しておく。もちろん、イギリス・バプテストにとって、「再洗礼（アナバプテストの意味）」という呼び名が、曲解を引き起こす可能性を十分に秘めた警戒すべきレッテルである理由を理解するのは、それほど難しいことではない。確かに、幼児洗礼は全くキリスト教的なバプテストマではないというバプテストの主張は、彼らが言わんとする主張の論点を外すものである。その反面、それは、バプテストに対する批判者の主張を全く妥当なものにもしてしまった。

しかしながら、問題自体はより深い点にまで進んでしまった。幼児洗礼の有効性の否定については、神学的には、これまでのキリスト教の教義の伝統から個人を切り離す危険と、「キリスト教社会」という全体的かつ包括的な概念を否定する危険をはらんでいる。20世紀の終盤にさしかかっている今日、これが意味するポイントの把握を探究する努力が求められている。同じように、ヨーロッパが、各々の国に住む人々にとって（様々な内輪揉めはあったにしろ）ひとつのキリスト教共同体であったということを、何世紀もの間、固く確信して受け継いで来たことについても、その意味を掴む努力が求められている。そのような理由から、幼児洗礼はキリスト教会への入り口であったと同時に、社会で市民権を得るためのものであった。それが、いかに小さな国における「市民権」であったにしろ、である。

更に、中世を通して、教会とキリスト教の正統信仰は社会を結びつけ、その一致を固める役割を担ってきたために、今や再洗礼派は、その一致を後退させる脅威をもたらすものとなった。宗教改革、それはヨーロッパの大部分で、少なくともふたつの異なった宗教的な共同体を対立させることを通して「キリスト教社会」という従来の概念の一体性を後退させた。とは言え、再洗礼派たちは（16世紀

にはすでに多くの異なったグループが存在していたが)、多くの場合、社会に対するいかなる責任性をも否定した。また、特定の再洗礼派については、広く共有された記憶もそこに横たわっていた。そのグループは、1534年から35年にかけて、ミュンスターで、混乱、反道徳、異端の限りを尽くした。当然、すべての再洗礼派はこのグループと同一視された。この「ミュンスター」神話の脅威は、ジョン・ペンダーヴスの葬儀に集まった一団を痛めつけた数人の兵隊について、政府がそれを擁護する目的で、1656年にプロパガンダとして発行した「ミュンスターとアビントン！」というパンフレットで示されている。

17世紀の、またはそれ以降のイギリス・バプテストの歴史は、「再洗礼派」と結びつけられてきたが、それはバプテストが「真実の教会」と自負する自身の特徴以上に、社会全体を不安に陥れる恐怖、また、決して忘れてはならないとされた赤い革命（red revolution）と結びつけられて議論されてきた。

次に述べられるべきは、バプテストは1891年に至るまでは、常に分裂の連続であったということである。その間、イギリスの大多数のバプテストは、2つの独立したグループに属していた。古いグループはジェネラル・バプテストと呼ばれ、オランダの神学者ジェイコブ・アルミニウスの信奉者が「万人のためのキリストの死」を信じていたことからその名称がついた。そのために、彼らは、誕生の時から「普遍贖罪」を信じていた。この群れは、オランダへ亡命したジョン・スマイスとトマス・ヘルウィスによってアムステルダムで誕生したグループである。その次に現れるのは、パティキュラー・バプテスト（または、カルヴィン主義的バプテスト）と呼ばれ、1630年代のロンドンで非合法の独立派教会として誕生した。彼らは、「キリストの死は選ばれた者たちにだけ」と信じていたのである。

これら両方のグループは、教会論については、多くの面で非常によく似た立場を取っていた。例えば、両者ともキリストの見える教会（the visible Church of Christ）は、神によって呼び出され、神によって集められた信仰者の群れであると信じていた。バプテストマについても、信仰者のバプテストマを主張しており、それを浸礼で（少なくとも1642年以降は）行った。にもかかわらず、両者は別個に教会を形成し、教会間の協力関係や働きについては異なった見解を持っていた。それぞれは、そのようにして各々の道を歩み、国内の様々な地域で発展して行ったのである。これもまた普通のことであったが、例えばリーディング（Reading）やコヴェントリー（Coventry）という地域では、いくつかのジェネラル・バプテストの教会、または、ベンジャミン・キーチ（Benjamin Keach）やマーク・キー（Mark Key）のようなジェネラル・バプテストがパティキュラー・バプテストに転向することがあった。ただ、この逆、つまり、パティキュラー・バプテストからジェネラル・バプテストへの転向はなかった。セブンスデー・バプテストのようなより小さなグループは、多数ではなかったものの、カルヴィンの神学に立つジェネラル・バプテストとして現れた。1650年代の事である。このバプテストは、一週間の7日目は、ユダヤ教と同じように、キリスト教においても神から定められた礼拝の日であるという確信に立っていたため、その点で当時の大きな他のバプテストグループとは異なっていた。この教会は、ステネット（Stennett）の流れに立つわずかな数であったが、イギリス・バプテ

ストの伝統に比類のない貢献を残した。

カルヴィン主義的、あるいはパティキュラー・バプテストは、17世紀の独立派（会衆派として知られることの方が多い）が主張していた明確なカルヴィン主義神学に立っていた。1646年のパティキュラー・バプテストの信仰告白は、1596年の分離派信仰告白にその多くを負っている。分離派信仰告白は、初期独立派のウィリアム・エームス（William Ames）の教えと、おそらくはドルド公会議に沿う固いカルヴィン主義を主張した。カルヴィン主義バプテストによる信仰告白のうち、最も影響力のあるものは、1677年に初版が出され、1689年のパティキュラー・バプテストロンドン会議で再出版された信仰告白（第二ロンドン信仰告白）である。

カルヴィン主義バプテスト派と独立派は、神学や教会論で重なり合う点が多く、このことは、ジェネラル・バプテスト派とパティキュラー・バプテスト派の違いを説明するのに役に立つものである。メンバーシップの理解と、晩餐式の理解についてそれについて述べてみる。メンバーシップについては、ジェネラル・バプテストは、一貫して「クローズド・メンバーシップ（信仰者のバプテスマを受けていない人を教会員として受け入れない方針）」を貫いたのに対し、カルヴィン主義的バプテストは、17世紀以降ずっと一枚岩となることなく、分裂さえ起きた。それについては以下のことが明らかになっている。1640年代から50年代の教派拡張期の当初、「クローズド・メンバーシップ」を採用していたカルヴィン主義バプテストは、当然の帰結として「クローズド・コミュニオン（信仰者のバプテスマを受けていない人と主の晩餐を分かち合わない）」の立場をとった。しかしながら、やはりこれも初期の頃から、幼児洗礼と信仰者のバプテスマの両方を容認した独立派教会、また、すでにバプテストとなっていた教会、あるいは後にバプテストとなった教会の中に、幼児洗礼しか受けしていない人も教会員として受け入れる教会があった。ベッドフォードのジョン・バニヤンの教会は前者、ヘンリー・ジェシーの教会は後者の最たる例である。ブリストルのブロードミードにあった最初の独立派の集会は、有力な独立派から有力なバプテストとなった初期の顕著なケースである。言うまでもなく、そのような教会は「オープン・コミュニオン（クローズド・コミュニオンとは逆に、幼児洗礼しか受けしていない人も教会員として受け入れ、共に主の晩餐に与る）」であった。1650年代、そしてその後しばらくの間も、多くの「クローズド・コミュニオン」の指導者とその教会は、「オープン・コミュニオン」の指導者や教会に対して極めて批判的だった。後者が秩序を乱しているという理由からである。履き違えた博愛主義は、実際そのように言われたが、そのような中、真実で、聖書的な秩序が勝利を収めるに至った。しかし、これにまつわる苦い感情は大迫害（The Great Persecution）の間に消え去ってしまい、1689年のロンドン会議開催の時期には、例えば、ブロードミードの会員などは、ほとんどの「クローズド・コミュニオン」の教会から入会を受け入れたほどであった。

不幸にも、ブロードミード記録、並びにヘンリー・ジェシー記録、ジョン・バニヤン記録（多くのバプテストが自分たちの仲間として認めたいバニヤンの）に対する特筆すべき評価は、パティキュラー・バプテストの初期の歴史記述において深刻な歪曲を被るに至った。つまり、歴史家は、「オープン・メンバーシップ」の確信が初期のカルヴィン主義的バプテスト教会の標準であったばかりではなく、教会の不可欠な部分であったと論じる傾向にあったからである。しかし実際には、17世紀のバプテス

ト教会の間では、「オープン・メンバーシップ」の立場をとる教会は少数であり、1650年代に地方連合を組織したパティキュラー・バプテストのほとんどは、「クローズド・メンバーシップ」を採用していた。もちろん、異なる立場の人々との間に交わりや友情がなかったと言うのではない。ただ、早い時期には、これらの人々は今日呼ばれているような「教会の交わり」は持っておらず、そのために、共なる交わりや伝道の働きを一緒に行う機会がほとんどなかったということを言いたいのである。

バプテスト内のこのような分裂の原因は、今日あえて脚注を付けるならば、それは「教会論」に対する関心を巡ってであり、その間で暗黙のうちに真理として了解されていた内容が明らかにされる以外に、その分裂を理解し、解明する手立てはない。これは、本質的には教会の秩序に関する聖書の権威の問題であり、すべての初期バプテストの思索の根底に「教会の質の問題」として存在していた問いである。この問題はまた、今世紀（20世紀）の世界各地のバプテストの思索とセンスに対して、変わることなく、極めて大きな度合いで影響を与え続けている。

初期のバプテストにとって、これらの了解事項は思索において自明であったにもかかわらず、それを聖書から証明することは容易ではなかった。しかし、それが聖書の正しい解釈のために、いかに深い洞察に満ちた関心を導き出したかよく見て取れる。その上、17世紀と、それに続く約2世紀の間、当時のプロテスタント諸派のライバルたちも、その了解事項を共有するようになったため、結果的にはほとんど疑問符をつけられることはなかった。

基本的には、以下のことが真理の了解事柄とされた。聖書はキリスト論と贖罪論のような神学的な問題に対する唯一無比の、そして最終的な権威であるばかりではなく、教会の真実の本質とその構成に関するあらゆる必要な事柄のための最終的な権威を有している。この了解事項の上に、その他の様々な事柄が積み上げられた。次のこともまた了解事項であった。教会は使徒の時代に組織され、唯一の形に従って整えられたが、それは、後世になって人々が教会を再構築できるように新約聖書の中に十分に示されている、ということである。しかし、これは、単に学問上のことばかりではなかった。教会というもののその形は、後世のいかなるキリスト者たちが、たとえ全く道から外れた状況にあったとしても、新しくする事ができ、またそうしなければならない。これもまた了解事項であった。その教会の形は、宗教改革の時にアナバプテストが、そしてエリザベス1世治世下のイギリス分離派が信じたように、教会は教区住民によってではなく、自ら責任を持ち、内なる確信を持って国教会から離れた男女の信仰者によって形成されるということを強く求めた。この真理を理解した時、共同体は復活のキリストの導きの下、自らを教会に結びつけ、共同体をつくりあげる努めと権利を持つのであった。その上、共同体は、教会の交わりに人々を迎え入れる権能を持ち、かつ、交わりに於ける規律を糺す責任を持っていた。そして、必要な時には、信仰の、あるいは行いの面で逸脱した教会員を放逐する力を持っていた。同時に、そのような教会は、役員（牧師）を選任する力、解任する力さえも備えていた。それも、その教会を支持し、その責任を共に果たそうとする教会が外に皆無であった場合でも、であった。

以上のような帰結は、次の場合、交わりの裏切りとなった。つまり、もし、唯一の真実な使徒的教会の形が再び構築され、その後、聖書ではなく、墮落したローマ・カトリック教会に倣って、最も重

要な教会の構成（並びにバプテスマ）を所有していると豪語するイングランド国教会のような偽りの教会を依然として肯定し、その教会との交わりを求める教会員がいた場合である。もちろん、一つの真実の形が漸しく構築されると、その真理を理解した人々によって、いかなる時と所にあっても、キリストへの真摯な服従という重大なことが再び制定されるだろうし、そうされなければならないということは信じられていた。そうしないのは、聖書が示す、すなわちキリストが示す使徒性の要求を欠くことであつたからである。使徒的モデルの再生というこの関心は、極めて多くのバプテスト文書群において、聖書の引照を伴ってはじめて完結する理由を説明する議論となつた。そこでは、すべての議論、論争、検討や吟味において、神の御旨が何であるかを見つけ出そうとしたし、バプテスマ、教会員籍、頭に手を置くこと（the laying on of hands）、十分の一献金、教会の働き、国家に対して果たすべき義務などを、神の御旨に照らしてどのように行うべきかが模索されたからである。

つまり、バプテストたちは、自分たちが神聖な教会の形をまだ完全に理解していないばかりか、その全てについて十分に従いきれていない事実を認めようとしていたのである。しかしバプテストは、批判者たちがこれまでバプテストが依つて立ってきた根拠から離れることを期待するのに先立って、まず聖書によって自らのポジションを明確に、そして適切に証明するように求めたのだが、それは自然なことであつた。同様に、聖書を通して、今後も主がさらなる導きの光と真理とを示してくださるという意識（sense）に至らせる、確信に満ちたバプテストたちの謙遜は、次の言葉で明らかにされている。それは、ロンドンのパティキュラー・バプテストによる1646年版の信仰告白の次の告白文である。

また我々は以下のことを告白する。我々が知っているのは一部分で、知りたいと熱望し、また知ろうと追い求める多くのことについても無知である。それゆえに、もし誰かが友情の念を持って、我々がまだ理解していない神の言葉から、それを示してくださるなら、神とその人たちに感謝する十分な理由を持つにちがいない。